

雨のヒメゴト：ガラにもない記念日

著者：玄野クロ

「あれ。何のケーキが好きだった……」

俺は仕事帰り、洋菓子屋に寄っていた。今日は早番のシフトで、彼女よりも早く帰れる。驚かそうと、ケーキを選んでみた。

今日は付き合ってから1ヶ月目。『記念日』なんて柄じゃあないが、自分にとっては特別な日だった。だって、大好だった片思いだと思っていた女性と付き合えたのだから。

「こちらのタルトがオススメです。最近よく売れているんです」

「イチゴのタルトかあ……確かに、美味しそうですね」

「女性に人気です。あとは、このチョコレートのタルト。ガナッシュはサッパリしていて、くどくないんです。でも、ちゃんとコクがあって、こちらは私のオススメです」

「なるほど……」

ショーケースの前をウロウロしている俺を見かねて、店員が声を掛けてくれた。実際困っていたからとても有り難い。

フルーツの好きな彼女だ。イチゴのタルトは当たりだろう。しかし、この店員さんのオススメの、チョコレートのタルトも捨てがたい。艶々としたチョコレートも、こんがりと

焼けたタルト生地も、飾りとして盛られている生チョコレートとパリパリのチョコレート細工。先端の生クリームのアクセントも良い。形も初めて見る形だ。ホールを切り取ったものとは少し違う。それらが組み合わさったのもあり、俺は惹かれていた。

「この、チョコレートタルトください。2つお願いします」

「かしこまりました。お包み致しますので、少々お待ちください」

店員さんは慣れた手つきでタルトをトレイに乗せると、背後の作業台で詰め始めた。

「どなたかと一緒に召し上がるんですか？」

振り向いた店員さんが俺に聞く。

「あ、はい。その、彼女と一緒に。恥ずかしいんですけど、今日で付き合って1ヶ月なんです。柄じゃないけど、でも、何かしたいなって」

照れ隠しに、頬をポリポリと掻きながら答えた。

「ふふふ。素敵ですね。きっと彼女さん、喜んでくれますよ」

ニツコリと笑ってそう言った後、また作業に戻った。

“だと良いんだけどな”

サプライズなんて大したものじゃないが、彼女には内緒だ。少しだけ、驚かせたい気持ちがあった。

こんなことをしようと思ったのは初めてだ。驚く顔と、喜ぶ顔が見たい。彼女の、コロコロ変わる表情が見たい。出来れば、プラスの方向で。そう思った。

待つ間、ショーケースの中身をまた眺めていた。どのケーキも美味しそうだ。今回のチョコレートタルトが当たりだったら、他のケーキを買いに来ても良いだろう。彼女と一緒に。

「お待たせ致しました。チョコレートタルト2点、お包みしております」

「有り難うございます」

「1ヶ月、おめでとうございます！ 未長くお幸せに。良かったら、彼女さんとまた来て

くださいね！」

「えっあつ、有り難うございます！」

『末長くお幸せに』なんて少々恥ずかしい。しかも、『彼女さん』だなんて、自分の考えが読まれているようで、余計に恥ずかしい気持ちになった。思わず奪うように包みを貰い、背を向けて早足でその場を去る。

「うわー……顔に出てないと良いけど」

包みを運ぶ間、俺は彼女の反応ばかり考えていた。きっと、喜んでくれる筈。あの可愛い笑顔で「有り難う」と言ってくれるのだろう。想像しただけで胸が熱くなり、顔がにやけた。

ガチャツ キイ

「……ただいま」

シン とした空気が当たりを包む。やはり、彼女はまだ帰って来ていない。ここは俺

の家だが、殆ど半同棲状態だった。

生活が不規則で、不摂生な俺を見かねた彼女が、まるで通い妻のようにいつも見に来てくれているから。

その中で、料理に洗濯、制服のアイロンがけ、時間を見つけては、何でもしてくれる。

これではいけないと、俺も自分で料理を作るようになった。包丁も持ったことのなかった俺が、米を炊いて味噌汁を作るようになった。彼女のおかげだ。洗濯もあまり溜め込まなくなった。山積みの洗濯物のある部屋に招待しなくなかったし、畳んでもらうのも忍びない。

初めは甘えようと思っていた部分もあったが、何も出来ない、出来るのにやろうとしなのは恥ずかしいと、彼女といて思った。

今日もまずはタルトの包みを冷蔵庫にしまい、干していた洗濯物を取り込んだ。

「あ。何時に帰ってくるか聞くの忘れた……ってか今日もくるか聞いてないや」

一番大事なことを忘れていた。いつも来るのが当たり前になっていたが、今日本当に来るかどうかは聞いていなかった。しまった。これで彼女が来なければ、折角用意したタルトの意味がなくなってしまう。

「あー……メールするかあ」

ヴーヴヴ ヴーヴヴ

噂をすれば何とやら、彼女からメールだ。

『もうすぐ家着くよ。今日は早いんだつたよね？』

良かった。今日も来てくれるんだ。

「うん、もう家に着いてる。ゆっくりで良いよ、気を付けてね」

そう返し、俺は洗濯物を畳み始めた。その洗濯物が畳み終わる頃、家のドアの鍵の開く音がした。彼女だ。

「……邪魔します」

「おかえりなさい！」

俺は急いで彼女を出迎えに玄関へと向かった。靴を脱ぐ彼女の手には買い物袋。何かご飯を作ろうとしているらしい。

俺は買い物袋を貰い、もう一度「おかえり」と言っ、彼女の返事も待たずに唇にキスをした。

「取り敢えずしまっておくね」

「有り難う。伊織が早いって聞いたから、お昼に買いに行っ、会社の冷蔵庫借りて入っていたの。おかげで早く帰れて良かった」

いつもの可愛い笑顔で彼女は言った。何度見ても可愛い。飽きない。いつまでも見ていたい。食材をしまうのは今日は俺のしごとだ。冷蔵庫の奥、ヨーグルトやケチャップ、味噌なんかで蓋をして、タルトを隠しているから。

彼女は荷物を置いて手を洗うと、置いてあるエプロンをしてキッチンに立った。

「俺もやるよ」

「そう？　じゃあ、レンコンとナスとパプリカに、エビ取ってくれる？」

「りょーかい」

彼女のサポートもまた仕事。出来れば、食べるために出すその時まで気付かないでいて欲しい。今の俺のささやかな願いだ。

「仕事はどうだった？ 普段早番少ないもんね」

「うん、ちよっと人手が足りなくて。でも、今日は暇だったかも。そっちは？」

「そうね、少し忙しかったかな。でも、残業しないように頑張ったよ！」

他愛ない会話をする。いつも家に帰って一人だった俺は、この時間すら愛おしいものになった。家に誰かいることで、こんなに明るく華やかになるなんて。想像もしていなかった。彼女だからこそなのかもしれないが、1ヶ月前の俺には想像もつかなかっただろう。

エビを焼く良い匂いがする。焦がした醤油と、ごま油の香ばしい匂いが鼻をくすぐった。「洗うのが面倒だよね」なんて2人で言いながら落ち着いたのが、このワンピースデイナー。木製の大きめのお皿に、ご飯、サラダ、メインを取り分けていく。

「はい、完成」

「美味しそう！ 早く食べたい！」

スープを注ぎ、プレートとスープカップをテーブルに運ぶ。彼女が持つて来た箸とお茶もセットして。

「いただきます」

口に広がるエビの風味。プリプリの食感と、香ばしい醤油の香りがたまらない。

俺は夢中に食べていた。どの料理も美味しい。万が一失敗したとしても、彼女が作ってくれる料理ならば、喜んで食べる。俺のために作ってくれたのだから。

いつものように会話を弾ませながら摂る食事も、いつもと違う部分があった。

それは、食べ終わった後。

「ご馳走さまでした！ うん、今日も美味しかった！」

「良かった。お粗末さまでした」

「あ……まだ、入る？」

「ん？ うん、まだ少しなら」

「あのさ、ちょっと待ってて」

俺は食べ終わった食器をシンクへと片付け、冷蔵庫から例の包みを取り出して彼女の前へと置いた。

「なあに？ コレ」

その包みを見て、キョトンとする彼女。その姿もまた可愛い。

ゆっくりと包みを解き、箱の中身が彼女から見えるように蓋を開けた。

「1ヶ月間有り難う。その、これからも宜しく」

恥ずかしくて、目を逸らしながら言った。

「……あ……」

彼女の方をチラリと見る。口ものを手で押さえており、その顔は真つ赤だった。

「やだ、これ、伊織が選んだの？ うそ、嬉しい、有り難う！」

彼女は俺に抱きつくと、頬にキスをした。

想像以上の反応だった。不思議に思っただけ俺も箱の中身を見る。

" これは。驚いた……"

箱の中のチョコプレートタルトは、ピースを買った筈なのにハート型になっていた。あの不思議な形は、ハートをふたつに割った形だったのだ。背を向けて斜めに置いてあったから、分からなかった。そもそも、そういう目で見ていなかったのもある。合わせるとハートになるだなんて。

そして、そのハートの真ん中。ふたつのタルトを跨ぐように、1枚のチョコプレートが置かれていた。これは、ショーケースのタルトには乗っていなかったモノだ。

同じくハートで彩られたプレートの真ん中に「I LOVE YOU」とチョコプレートで書かれていた。……俺は頼んでいない。あの店員さんが、恐らく気を利かせて、もしくは

はイタズラで書いたのだろう。

「可愛い！ これ可愛くて美味しそう！ 伊織、本当に有り難う。私も、愛してるよ」

嬉しそうにはしゃぐ彼女を見ると、思わず口元が緩む。

「こりゃあ、あの店員さんにお礼を言いに行かなきゃな。彼女も連れて」

思わぬサプライズに、俺まで嬉しくなった。

「……愛してるよ」

「……んっ……んん……ふう……っ……」

俺は深く口付けた。舌をゆつくりと絡ませ、唇に吸い付く。彼女は甘い吐息を漏らしながら、俺の背中に腕を回し、しがみついた。

「んん……んん……」

彼女の指に力が入るほど、俺は激しく舌を動かす。もつと、俺を感じて欲しいから。

「ちゅっ……んん……ふぁ……」

唇を離すと、とろんとした目で彼女が俺のことを見ていた。

「続きは寝る時に、ね？」

「……うん」

胸に顔を埋める彼女を、そつと抱きしめた。

これから沢山時間はある。甘くて美味しいチョコレートタルトに舌鼓を打ちながら、これから先のことをぼんやりと考えていた。

そのチョコレートタルトに、負けず劣らず甘い生活になるだろう日々を。